

「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代

日比嘉高

第8・9回

島崎藤村、写実小説のジレンマ 3 一九〇七年のモデル問題

藤村の小説を機に巻き起こったモデル論議。

その騒擾からなにが見えるか――

1 モデル問題の経緯

▼「旧主人」以降の藤村の足跡

一九〇五年 小諸義塾を辞職、東京・西大久保へ

一九〇六年 『破戒』刊行

一九〇七年一月 第一短篇集『緑葉集』刊行（「水彩画家」を含む）

六月 「並木」『文芸倶楽部』臨時増刊号「ふた昔」、一九〇七年六月

1・1 モデル問題、勃発——藤村の「並木」

「並木」の登場人物たちそれぞれにモデルがいるとされ、彼らが反論を書くという噂が立った。

■引用1 ■ 「文芸界消息」『趣味』一九〇七年六月

「△今度藤村氏が文壇知名の文士を主人公として小説を書いたので二文士はそれに就いて大に自分の意見を書くさうだ一寸東西に例のない珍話である」

■引用2 ■ 「文芸風の便」『読売新聞』一九〇七年七月三日

「△『ふた昔』所載の藤村氏の『並木』の主人公相川は馬場孤蝶氏を、副主人公の原は戸川秋骨氏を青木某は生田長江氏を高瀬は藤村氏自身を最も露骨に描写したものださうな」

■引用3 ■ 「文芸界消息」『国民新聞』一九〇七年七月五日

「▲「並木」の主人公にされた馬場孤蝶「並木」を読んで曰く己れだつて之れ程意気地のない男ではないよと目下五十頁許りの「並木感」を書いてる相だ」

1・2 田山花袋「蒲団」のモデル問題

『並木』のモデルたちの反論と同月、田山花袋が「蒲団」『新小説』を発表する。自分自身を主人公に、女弟子に対するひそかな慕情を書いた。

■引用4 ■ 「文芸風の便」『読売新聞』一九〇七年九月二三日

「△田山花袋氏の「蒲団」のモデルとされた早稲田大学生某と、岡田道代子^{ミチヨ}とは名を連ねて「モデル不平録」を来月の新潮に掲載する相だ、妙な事が流行しだしたものだ」

1・3 丸山晚霞の藤村批判——「水彩画家」

■引用5 ■ 「文芸風の便」『読売新聞』一九〇七年九月十五日

「△島崎藤村氏と馬場孤蝶氏の友情は『並木』事件以来面白くなくなつたさうだが今度は更に島崎氏と丸山晚霞氏との間に面白くない現象が起つて来たと云ふ、原因は藤村氏の『水彩画家』の主人公は晚霞氏をモデルとしたもので、而も矢張り実際と作物の上との相違や矛盾を摘発して世上に訴ふべしと丸山氏が息まいて居る」

1・4 モデル論議の沸騰

▼一九〇七年のモデル論議 主要関係作品と記事

- 七年 一月 藤村「緑葉集」刊行（「水彩画家」を含む）
- 七年 六月 藤村「並木」発表
- 七年 九月 田山花袋「蒲団」発表
- 七年 九月 同月一日 特集「事実と作品」『文章世界』
- 七年 一〇月 〔後藤〕宙外「自然派とモデル」と「随感録」『新小説』第十二年十号
- 七年 一〇月 同月二、九日 鶴鶴子「小説の材料（上）（下）」『東京二六新聞』
- 七年 一〇月 同月九、一〇、一三、一五、二二日 桜芳「主人公問題（一）〜（五）」『やまと新聞』
- 七年 一〇月 同月一四日 素堂「モデル事件」『万朝報』
- 七年 一〇月 同月一四日 天壇「所謂自然主義の道義的価値」『東京日日新聞』
- 七年 一〇月 同月一五日 河漢子「文芸時評」『日本及日本人』第四六九号
- 七年 一〇月 同月二〇日 白雲子「無題録」『読売新聞』日曜附録
- 七年 一〇月 一月 〔時評作品と模型』『帝國文学』第十三卷第十一、第一五六号
- 七年 一〇月 一月 〔文芸彙報』『明星』未歳十一号
- 七年 一〇月 一月 〔彙報文芸界』『早稲田文学』
- 七年 一〇月 一月 中村星湖、島村抱月「モデル問題の意味及び其の解決」『早稲田文学』同号
- 七年 一〇月 一月 徳田秋声「事実と想像」『趣味』第二卷第十一号
- 七年 一〇月 一月 柳葉「文界時事 △作家と材料問題」『文芸倶楽部』第拾参卷第拾五号
- 七年 一〇月 一月 塚原澁柿「自然派に対する注文」『太陽』第十三卷第十四号
- 七年 一〇月 一月 長谷川天溪「余白録」『太陽』同号
- 七年 一〇月 一月 岩野泡鳴「文界の私議」『読売新聞』日曜附録
- 七年 一〇月 一月 戸川秋骨「モデル問題」『中央公論』
- 七年 一〇月 一月 藤村「春」『読売新聞』に連載

1・5 論議の争点——文芸か？ 道德か？

論争は、「並木」のモデルたちの不平・非難から始まった。そのため、論点はモデルを使って小説を書くことの可否をめぐるものとなった。

A 「文芸」を支持する立場

■引用6 ■ 「時評 作品と模型」『帝國文学』一九〇七年一月

「作家がその使用する所の模型^{モデル}そのまゝに描写せると否とは、その作品の価値を秤量すべき標準とはならず、従つて、作品と模型とを比較して、その相違を責むるが如きは、文芸批評家の所論として、頗る帰路^セに外れたるものといはざるべからず。」

■引用7 ■長谷川天溪「文芸雜感」『文芸俱樂部』一九〇七年二月

「作者がモデルを取りて其の性格を發展せしむるは其の自由なり。之に対してモデルたりし者は、吾れは斯くの如くに非ずと力味出したりとて、何の利かあらん。」

B 「道徳」を支持する立場

■引用8 ■柳葉「文界時事 △作家と材料問題」『文芸俱樂部』一九〇七年二月

「元來作家が何を書かうと自由なるには相違なければ作家として人間なり現社会の一員なり、親もあり妻もあり友人もある人に相違なければ、夫等に対する責任も義務もある人に相違なし、文学者なれば徳義を省みる必要なしといふ道理はあらざるべし」

「斯る事件は是を文学上の問題となし文学絶対論など担ぎ出すべきものにあらず、要は唯文学者の徳義に訴へて警告を為し置くべきものならん也」

C 双方を分けて判断する立場

A、Bの立場の対立は、論理的には両立しうる。つまり、文芸上は良くても道徳上はいけない、という立場である。この立場こそ、この時代を考える上で興味深い。

■引用9 ■「文芸彙報」『明星』一九〇七年一月

「◎小説のモデルに就いて世評を惹起した様子だが、作家がモデルを使用するのは毫も非難すべき理由を見出さぬ。それは画家がモデルを使用するのと同じことだ。併し、作家が自分は何人をモデルにしたと之を吹聴し又之をモデルに使用したる人々に告げて予め承諾を求めるのは間違つて居る。モデルを写すためにモデルを使用するので無く、作家が観た人生を写すために使用するのであるから、作に必要な以上、何人をモデルとするも自由である、技芸上には少しも差支へぬけれど、若し何人をモデルにしたとわざわざ公言することに成ると、『並木』対馬場氏の關係の如く、モデルから抗議を申込まれ、社会から非難されることに成るであらう。之は作者が文芸上の良心には少しも苦痛を感じないが、道徳上の責任は之を引受けねば成るまい。」

2 モデル論議はなぜ起こったか

一九〇七年のモデル論議の発端には、まず「道義」的なトラブルとしての問題がある。「一部の人士間には、かう友人の事を書くのはいゝ事だらうかどうかと云ふ事が問題に成つて居る、但しこの問題の意味が、文芸上の事か道徳上の事かは聞きもらした。」（「緩調急調」『新声』一九〇七年八月）

これに加えて、この時期に固有の文学界の変化が影響した。

2・1 文学者側の要因

- リアリズム
- 取材領域の変化 作家の身边へ（≡文学者も多い）

■引用10 ■島崎藤村「序」『緑葉集』春陽堂、一九〇七年一月

「予が北部の信州に入ったのは三十一年の春であつた。七年の間、予は田舎教師として小諸に留つて、荒涼とし

た高原の上の生活を眺め暮した。真に『田舎』といふものが予の眼に映じ初めたのはその頃からのことである。そこで身のまはりから始めて、眼に映じたまゝ心に感じたまゝを写して見ようと思ひ立つた。予は先づ農夫の粗末な写生から始めた。」

■引用11 ■ 鶴鶴子「小説の材料（上）」『東京二六新聞』一九〇七年一〇月二日

「近来小説家が自分の経験を書いたり、其友人をモデルに使ふことが非常に流行する。一般の傾向が、自分の経験或は自分が親しく見たり聞いたりして実際に感じたことを、精細の且つ深刻に書く様になつて来た」

個人主義が発展してきた。「だから詩を作るにも小説を書くにも、其の材料は先づ自分が実際に泣いたり笑つたりした事実を取つて之れを描写する。然らずんば直接に其の悲しみや喜びに参与した友人のことか、或は見たり聞いたりして比較的痛切に感じた事実を写すより外に方法はない。」

■引用12 ■ 白柳秀湖「自然主義と虚無的思想」『新声』一九〇七年一二月

「此の如くにして瞑想の時代は来た、沈思の時代は来た、彼らの捉へて来る所は、忌憚なき自己の解剖、懺悔でなければ親しい友人や知己の事ばかりだ、彼等は好んで自己の周囲に実在する人をモデルとして、喜ぶのではない、彼等が人生の真実を描かんとする創作的情熱は、自然に彼等を駆つて其日常生活に近い人物をモデルにとらしめるのだ、決して浅薄な好奇心から旧主人や、知己の私事を評発しやうといふのではない。」

2・2 メディア側の要因

- 作品・作家に関する付加的情報に価値が出てきた（例・噂話の掲載） ↑ 「文学」価値づけの上昇
- 新しい文学潮流（自然主義）と関連づけて取り上げられた

2・3 読者側の要因

- 小説と作品・作家に関する付加的情報とを交差させて読む読書慣習の形成
- 作品の背後に「現実」がある、という期待
- ゴシップ的興味

3 モデル問題から見える明治末の風景——プライヴァシーと文学

3・1 「プライヴァシー」意識

明治時代とはいえ、「プライヴァシー」——この言葉はなかったが——についての意識はあつた。

■引用13 ■ 「緩調急調」『新声』一九〇七年一二月

「僕は新声記者の「蒲団」の批評は大に不服だ、事実を書いたからといふて文芸上の価値が左右される事の無いのは記者のいふ通りだか、妄りに人の私事を天下に公表したといふ道德上の責任はどうしても免れないだらう。」

■引用14 ■ 中村星湖、島村抱月「モデル問題の意味及び其の解決」『早稲田文学』一九〇八年一月

「写真的な、ありのまゝの描写といふ事は、其の結果として原本となつた人物事件を暗所醜所までも直写する点から、ちやうど新聞紙の摘発の記事と同じ影響を其の人に与へる。此の意味からモデルとなつた人は不平を言ふであらう。また必ずしも暗所醜所を描かずとも写真的に自家の内事を摘発せられるといふことみずからに対して既に不満を懐くものもあらう。」

3・2 モデルたちの訴え

【資料1】 馬場孤蝶「島崎氏の『並木』『趣味』一九〇七年九月

【資料2】 「並木」の副主人公・原某「金魚」『中央公論』一九〇七年九月（戸川秋骨執筆、「並木」の続編小説）

【資料3】 丸山晚霞「島崎藤村著『水彩画家』主人公に就て」『中央公論』一九〇七年一〇月

【資料4】 蒲団のヒロイン 横山よし子「蒲団』について」『新潮』一九〇七年一〇月

【資料5】 中山落峰「花袋氏の作『蒲団』に現はれたる事実」『新声』一九〇七年一〇月

● 抗議・訂正の訴え ↓ 一方で、メディア空間で発言しうることの特権とメリット

● 迷惑

3・3 周囲の反応

● 議論は文学者の「徳義」や「道徳」の問題としては議論されたが、書かれたモデルの「被害」の問題はほとんど論じられなかった。ただ「迷惑」がかかる、とだけ。

● しかも書かれたモデルについて言及される場合、一般論としてか、「知名」の人士についてだけだった。これはモデル問題が藤村の友人間の問題と捉えた論者が多かったことにもよる。

それゆえ、たとえば岡田美知代などのような弱い立場の存在については、まったく誰も顧みない。

その岡田でさえ、高学歴かつ文学者志望の「書ける」女性だった。

■引用15 ■（後藤）宙外「自然派とモデル」『新小説』一九〇七年一〇月

本来作家は材料選択の自由を有す、何をモデルに取らうが模写しやうが決して他から咎むべき理由はない。それ故単に友人をモデルに取つたといふだけでは問題にならぬ。けれども明かに何人かを指して、そを有りのまゝに写したといふ時、特にその人物は社会上知名の人であつて、作中の人物を通じて直ちに其の人格の如何を議せらるゝの場合に当つては、少くも一考を値するの問題とならう。」

▼では、どうする—— 明治末の解決

解決法1 言わなければ問題は起こらないのだ

■引用16 ■ 馬場孤蝶『趣味』一九〇七年一二月

「第一、誰をモデルに為たなどゝは、滅多にはいふまいし、モデルが誰だか、直には当りの付かぬやうに為て置く慣例であるから、少しも心配は無い。今問題にのぼつた作家島崎藤村子でも、かういふ用意は何時も為て居るのである。」

「藤村氏がモデルの何人なるかを公言したことは過失だ」（『文芸叢報』『明星』一九〇七年一月）

解決法2 道徳的責任を交換せよ

- 引用17 ■ 中村星湖、島村抱月「モデル問題の意味及び其の解決」『早稲田文学』一九〇七年一月
「当面の疎通法」

「作家に向かつて成るべく其のモデルは云々の人であるといふ如き實際上の事を、世に流布せしめぬだけの用意があつて欲しい。〔…〕モデルとせられた人に対しては、少なくとも作家に悪意の動機なくまた右に言つただけの用意にあらば、之れを己^{マイ}みがたい世相と見て、作家の志を諒とするやうに望む。事実が其の人のそのまゝであれば、之れを読んでそれと心づくものは、矢張り読まずとも其の事は知つて居る道理である。また甚しく事実と相違して居れば、それだけまた事情を知つて居る者には、当人の事で無く作者の変造物であることが分かる筈である。若しそこに気づかずして文芸上の作品に現はれるものは総て文字通りに事実であると誤解するものがあつたら、それは誤解者の罪である。事実世間には此の種の誤解者がある、併しそれは何所までも誤解といふこと即ち聡明の度の足らぬといふ罪であるから、是れが為め正当者に歩を枉げよと強ふる訳は無い。之れを要するに、作者とモデルとは動機と用意とに於いて当面の道徳的責任を交換する外はあるまい。」

4 文学空間の変化——大正文壇へ

▼後藤宙外の予言——純文学的創作と受容の成立。「諜者の眼」

- 引用18 ■ (後藤) 宙外「自然派とモデル」『新小説』一九〇七年一〇月

「唯吾人の恐れるのは、右の如きことが文士間に大流行になつたら何うか。既に流行の徴は充分に見えてゐる、この結果を予想すると余り楽しいものではない。又感服すべきものでも無い。〔…〕〔…〕或意味に於いて友人を犠牲にし、友人を食物^{くひもの}にし、総て近きものを諜者の眼を以て見ることにならう。」

▼「純文学」共同体の成立

- 引用19 ■ 高橋昌子『島崎藤村 遠いまなざし』和泉書院、一九九四年五月

「こうした雑誌記事に接した読者はやがて発表された『春』を読むと、それがまったく匿名的、暗示的、省略的方法で書かれていても、予備情報と符合させながら読むことができたわけである。同時に文壇ジャーナリズムに不案内な読者はここで置き去りにされた。ここに、作家とジャーナリズムと一部読者が三つ巴になって、作品を作品外の事実との関係において読む、という読書法の形成の一端を見ることができているのではないか。」pp.100-101

▼私小説へ

- 引用20 ■ 金子明雄「並木」をめぐるモデル問題と〈物語の外部〉——島崎藤村の小説表現Ⅲ——『流通経済大学社会学部論叢』一九九五年三月

「モデル問題で非難的のとなつた暴露的な作者の態度は、自己告白の小説においては肯定されるべき美点に反転する。文学的言説を受けとめる読書空間に大きな地場の変動が起こっているのである。」p.16

▼〈事実への興味〉の抑圧と回帰

文芸上の問題としての〈事実〉への接近は、しかし同時に事実への関心の「魅力」を探り当ててしまったのではないか。読者の素朴な知りたい欲望。ゴシップ的興味。

■引用21 ■ 「緩調急調」「新声」一九〇七年一月

「×『趣味』の『並木観』は、大変面白かった。楽屋落だと云ふ非難があるが、読者は、作物のみに満足せずして、作家の経歴は勿論、日常の一挙一動に至るまで、成るべく詳細に知らんことを欲するものだ、作家の伝記、逸話が世人に愛読せらるゝのはこの理があるからだ。『並木』の作者が紙表に躍如たるより見れば、楽屋落も有りがたい。」

「■田山花袋ともある可き者が、情人のある女に惚れて、其揚げ句が脂くさい蒲団を被つて寝るといふに至つてはアマリに驚かざるを得ない。」(サクストン)

「△『新潮』で横山よし子を書いた花袋の弁解きかれぬきかれぬ「蒲団」に現はれた田山花袋はたしかに一種の色情狂だ。」

■引用22 ■ 白雲子「無題録」「読売新聞」日曜附録、一九〇七年一月二〇日

「△「君は僕をモデルにして小説を書いたが、併し実際僕の性格は君の書いたものとは異つて居る。若し実際の場合に那樣ことはせん。」と云つた風のことを云つたとて、何も其が倫理学者の判断を煩す程の問題を構成する原因ともならなければ理由ともならない。むしろ其作者の創作の態度、材料の取り扱ひなどが分つて一種の面白味を与へる位のものである。」

↓ もちろんこうした好奇心は「文学外」のものとして排除される。

↓ 事実にもとづいたりアリズム文学が事実を必要とする限りにおいて、この好奇心は否定されながら——あるいはされることによつて——回帰し続ける。

5 藤村のその後

モデルを明かさなければ問題は起こらない——と同時代に繰り返し指摘があつたにもかかわらず、藤村はモデル小説を書き続けた。

【資料6】 島崎藤村「新片町より」 『文章世界』一九〇九年四月、「モデル」と解題し『新片町より』佐久良書房、一九〇九年九月

これは藤村だけではなかつた。文壇は雪崩を打つて身辺小説、私小説へと向かう。「親友同志」が「謀者の眼」で見合う時代の到来である。

島崎藤村は、その先頭を走つた作家といふことができる。だが、彼の小説を読むとき、彼の厚顔無恥とも言うべき発言に対して、作品の言葉は〈書かれる者の痛み〉、〈書くことの恐怖〉を察知していてもいたように見える——